

日本線虫学会ニュース

Japan Nematology News

目次

事務局から	1
2007 - 2008 年度 日本線虫学会 役員選挙について	
2007 年度 正会員費納入のお願い	
会員情報確認のお願い	
第 14 回線虫学会大会報告	
2007 年 (第 15 回) 日本線虫学会大会のお知らせ	
記事	
(故) 西澤 務さんを偲ぶ (中園和年)	3
第 14 回日本線虫学会大会に参加して (佐藤恵利華)	6
線虫へのチャレンジ (武田 甲)	6
広島県における線虫研究事情 (軸丸祥大)	8

[事務局から]

2007 - 2008 年度 日本線虫学会 役員選挙について

2007 年 3 月末をもって、日本線虫学会現役員の任期が満了となります。本学会会則に従い、2007 - 2008 年度の役員選挙を実施します。会長および評議員は、本学会の運営に責任を持ち、その発展を左右しますので、その選出にはより多くの会員の意見が反映されることが重要です。投票上の注意事項をご参照の上、必ずご投票下さいませようお願い致します。

* 会長は、会員名簿中の正会員から 1 名を選び、「会長選挙用の投票用紙」に、その氏名を記入して下さい。現会長の二井一禎氏は連続 3 選の禁止規定 (会則第 3

章第 12 条 2 項) により、会長の被選挙権をもちませんので、ご注意下さい。

* 評議員は、会員名簿中の正会員から 10 名以内 (定員は 10 名) を選び、「評議員選挙用の投票用紙」に、その氏名を記入して下さい。

* 会長および評議員用の両投票用紙は、内封筒 (無記名) に一緒に入れ、それを返送用封筒 (投票者の住所氏名を必ず記入) に入れて、学会事務局宛に郵送して下さい。

* 会員名簿、会長および評議員選挙用投票用紙各 1 枚、内封筒、返送用封筒は、本ニュースに同封しております。

* 投票の締め切りは、2007 年 2 月 28 日 (水) 必着とします。

* 本選挙にかかる会則および選挙細則は、

会員名簿に収録されておりますので、ご参照下さい。

2007 年度 正会員費納入のお願い

同封されている会費納入依頼文書をご確認の上、2007 年度正会員費 ¥4,000 を郵便振替でお早めにお送り下さい。2006 年度以前の未納会費がお有りの方は併せてお送り下さい。正会員費は前納となっております。本学会は会員の皆様からの会費により運営されております。会費の滞納は学会運営に支障を来しますので、皆様のご協力をお願い致します。なお、学生会費 ¥2,000 の適用には、指導教官による証明（署名・捺印を郵便振替用紙の通信欄にお願いします）が必要です。また、退会を希望される方は必ず事務局までご連絡下さい。

会員情報確認のお願い

同封されている会員名簿をご確認頂き、誤りや変更がありましたら、学会事務局までご連絡下さい。連絡には、TEL、FAX、E-mail のほか、年賀はがきの書き損じや残りを使われても構いません（連絡先はニュース末尾に記載されています）。ご連絡を頂きませんと、学会事務処理に支障を来しますので、よろしくお願い致します。

第 14 回線虫学会大会報告

1. 第 14 回大会開催される

第 14 回大会は 2006 年 9 月 14 日～15 日に、つくば市の筑波研修センターで開催されました。大会事務局は農業環境技術研究所（荒城雅昭大会事務局長、岡田浩明氏）に置きましたが、森林総研との合同開催とし、会計や運営に森林総研の会員（相川拓也氏、神崎菜摘氏、前原紀敏氏）が協力しました。本学会のつくば大会は、これまで

研究交流センターまたは研究支援センターで開催してきましたが、今大会は会場に併設された宿泊施設を利用できる筑波研修センターで開催を試みました。参加者は事前登録 72 名（一般 53 名、学生 19 名）、当日参加 11 名の計 83 名で、例年を若干上回りました。9 月 14 日に開催した懇親会には 56 名が参加し、懇親会も大いに盛り上がっていました。15 日夜には線虫ビデオを見ながら軽食と情報交換を行う場として「線虫を見ながら語る夕べ 2」が企画され、30 名以上の参加者をもって懇親会以上に中身の濃い情報交換の場となりました。このような企画が可能となったのは、宿泊施設のある会場を利用できた効果だと思われます。

演題数は過去最多の 38 題（一般講演のみ）でした。今大会では学生会員の発表が多く、講演における質疑も大変活発で、線虫研究の分野に若い血が通いはじめたことに頼もしさを感じた古手の会員も多かったようです。なお、今大会では大会翌日の 9 月 16 日（土）の 9:00～14:30 に「土壌線虫の観察同定実習」（会場：つくばリサーチギャラリーオリエンテーションルーム）を企画したところ、定員 30 名のところ講師・オブザーバーなど実質は 40 名近くの参加者があり盛況でした。

2. 評議員会・編集委員会合同委員会報告

標記合同会議は 2006 年 9 月 14 日 9 時より筑波研修センターにて開催しました。この詳細と総会の報告は、学会誌 36 巻 2 号に会報として掲載しました。会議の要旨は以下の通りです。1) 会員動静、大会、総会、評議員会の開催状況、学会誌（36 巻 1 号、2 号）の出版見込み、ニュースレターの発行状況が報告されました。2) 2005

年度会務報告と会計決算報告、2006 年度事業計画と会計予算案が事務局から報告され、質疑の上承認されました。土壌線虫の観察同定実習（大会直後の 9 月 16 日実施）を 2006 年度の事業計画としました。3）分類学会連合の活動報告が行われました（荒城評議員）。4）日本線虫学会誌の J-Stage（文部科学省が運営する電子ジャーナル発行支援システム）登録計画につき方針の説明が行われました（奈良部孝委員）。登録費用を 2007 年度会計予算に計上し、J-Stage 登録作業をホームページ委員会の所掌範囲とすることとしました。5）個人情報保護のため会員名簿には氏名、所属機関、所属住所に限定して掲載し、退職して所属機関がない会員の住所は本人の許可を得て掲載することとしました。6）小倉委員長から 36 巻編集作業の進捗状況ならびに学会誌の新体裁について報告され、承認されました。国内非会員の積極的な投稿を促進するため投稿規定の文言を一部改正することとしました。改定された投稿規定は学会ニュースとホームページでアナウンスすることとしました。7）次期大会は、関西圏で 9 月に開催する予定であることが次期大会委員長の二井一禎会長から報告されました。

2007 年（第 15 回）日本線虫学会大会のお知らせ

2007 年（第 15 回）日本線虫学会大会を、9 月に関西圏で開催する予定です。現在、二井一禎会員（京都大学、現会長）を中心に京大の会員が準備を進めています。多数の会員の参加を期待いたします。発表の心づもりをされ、今からご準備下さいませようお願いいたします。大会の案内は次号に掲載する予定です。

[記 事]

（故）西澤 務さんを偲ぶ

中園和年（かすみがうら市）

「西澤さんご逝去」との電話報を頂いたとき、一瞬よぎった「まさか？」の思いは今なお余韻を残す。ほんの 3,4 ヶ月前、「毎週ゴルフで鍛えているんだ」と、いかにも元気はつらつだったのに。

平成 18 年 12 月 3 日逝去、享年 76 歳。お聞きしたのは 11 月、ゴルフ場でプレイ中に脳梗塞を発症、救急入院され、一時は小康状態だったとのこと。西澤さんは、私見によれば、一面、仕事の鬼、情熱の人あるいは生一本の男とも呼べるお人柄だっただけに、趣味のテニスもうまかったが、余生は線虫を離れてゴルフに賭けておられたのではあるまいか。人生、まだまだこれからという矢先にご遺族の胸中はいかばかりかと心からお悔やみを申しあげたい。

西澤さんは、昭和 5 年 2 月 19 日、長野県南佐久郡佐久町にて生を受け、昭和 24 年 3 月、東京農林専門学校（現、東京農工大学の前身）農学科を卒業され（植物病理学専攻）、静岡県立農事試験場（当時）の病害虫発生予察事務嘱託を経て、同 25 年 4 月、技師補として採用され、農林省の指定試験『天敵利用に関する試験研究』で大きな成果を残された（故）彌富喜三先生（日本線虫研究会初代会長）の下で研究の道に入られた。昭和 28 年 9 月、名古屋大学農学部へ栄転された彌富先生に抜擢されて同大学へ転出、害虫学研究室助手として線虫学の研究と学生の指導に当たられた。次いで昭和 44 年 3 月、農水省農事試験場環境部虫害第二研究室長（埼玉県鴻巣）にご栄転、同 51 年 4 月、農業技術研究所病理昆虫部線虫研究室長（東京、西ヶ原）へと異動になった。さらに同 58 年 12 月、新



在りし日の西澤さん（右端）：中園氏・小林氏の退官祝賀会にて（1994年頃）

体制の農業環境技術研究所環境生物部微生物管理科線虫・小動物研究室長を歴任し、平成2年3月、定年退官された。大学から国の研究機関に移られてからも名古屋大学、東京農工大学、東京大学等で線虫学の講義を併任担当された。

西澤さんの研究と業績は極めて多岐にわたる。まず、静岡時代に甘藷のネコブセンチュウの耕種的防除法、イチゴセンチュウの形態・生態・被害、有機リン剤の線虫防除効果等々の研究があり、名古屋大学時代には、彌富先生の下でなされた数々の実験と線虫学の啓蒙・普及の仕事がある。その大部分は、彌富先生の下ささえ、あるいは口頭発表、謄写刷り成績書の段階で終わっているため、現時、一般に参照できるのは数少ないのが惜しまれる。この時代は、日本農業の政策重点課題が水田作から畑作へ

移ったときで、必然、土壌線虫の発生被害の重要性が全国的にクローズアップした、いわば黎明の時期でもあった。行政的には昭和34年から5年間、全国各県に土壌線虫検診員が配置され、土壌検診事業が実施された。そのため農林省主催で線虫の見分け方、分離法などの検診技術研修会が行われ、西澤さんも講師先生の一人として活躍された。

未発表研究の一例：昭和33年度から始まった「主要植物寄生性線虫に関する研究」（農林漁業試験研究費）の昭和35年度成績概要書（謄写）によると、彌富喜三・西澤務共著で、「A. ベールマン漏斗法の検討、a.ネコブセンチュウ幼虫の検出率と土壌の粘土含量との関係、b. ネコブセンチュウの検出率と土壌含水率、c. ネグサレセンチュウの分離と分離時間および

土壌量、d. ネグサレセンチュウの分離と温度との関係、B. ネグサレセンチュウを対象とした土壌中からの分離法の比較、C. 土壌中からのネコブセンチュウ卵および卵塊の分離、D. 防除法に関する研究、a. 殺線虫剤のネコブセンチュウ寄生残留根に対する効果、b. 殺線虫剤の選択的効果と有効拡散範囲、c. 植物の生育に及ぼす殺線虫剤の副次的効果」について綿密、かつ精力的な実験法と結果の記載がある。

その他にも数多いお仕事の中で特筆すべきは、甘藷のサツマイモネコブセンチュウ抵抗性品種、農林 2 号に寄生するネコブセンチュウの抵抗性打破系統を発見、線虫寄生細菌パスツールア属にネコブセンチュウ寄生系統とシストセンチュウ寄生系統があることを発見されたことであろう。特にダイズシストセンチュウ寄生系統はのちに、新種 *Pasteuria nishizawae* Sayre *et al.* 1992 として記載され、永遠の栄誉が刻まれた。晩年は特に生物的防除法の研究・普及に活躍されたのが印象強い。

西澤さんは本学会の前身である日本線虫研究会の創立活動には積極的に参画され、以後、運営委員として活躍されたほか、第九期会長も務められ、さらに会誌編集委員長として、また事務局業務にも長年にわたる骨身惜しまず尽力された。

定年退官後は日本植物防疫協会研究所（牛久）に調査役で迎えられ、後に技術顧問となってその幅広い見識と技術力を十二分に発揮された。そして平成 12 年 2 月末に晴れて悠々の身となられたのだった。

最後に私的な関わりに触れさせて頂くなら、筆者、昭和 34 年に旧農業技術研究所線虫研究室に就職以来、直接間接にご指導、ご鞭撻を賜り、中でも昭和 51 年からは一戸稔さんの後任室長として、また九州に転

出後も文献蒐集、論文ご校閲等、何くれとなくお世話頂いた。

あのころ盛んだった部屋の飲み会、西澤さんはビールひと口で真っ赤になって、そのお顔でお酌されると断りきれずつい深酔いする羽目。たばこは煙突の如し。

昭和 55 年 1 月、十数年来の懸案、つくば研究学園都市への研究所移転の際は、研究室一丸、荷造り・荷担ぎに汗だくの日が続いた。まだ健在だった若手同僚（故）岡本好一君の大活躍ともども、心に残る。

お付き合いを通じて領けたことは、かつて国内には文献も教科書も実験機器も、ほとんどないに等しかった時代（コンピュータ、インターネットはない！文献は筆写かカメラ接写または別刷り請求）に、この「仕事の鬼」は、全くの独学で線虫学の知識と実験技術を修得されたこと、公には常に言葉厳しいけれど反面、誠に人情細やか、温かい心の持ち主ということであった。

晩年には、興がのると昔の回顧談が口をまれ、ふと涙される場面もあったとか。余人の想像を超える厳しい条件下でひたすら刻苦勉励、かくして今日の西澤さんが生まれたことを物語る一事と思う。ご持論は、「研究を目指す者、テーマは自分で探す、むろん、実験は自分で、誰かの手助けなどあてにせず」であった。

ここにまた一つ、気骨の星が天に帰っていった。ご命日は、奇しくも年々廻りくる筆者の「日」でもある。ご縁かと思う。

あの少しはにかみ屋のお姿を偲びながら、深甚なる謝意とともにご冥福を心からお祈り申し上げます。合掌。

第 14 回日本線虫学会大会に参加して

佐藤恵利華（農工大院）

土壌微生物をメインターゲットに研究を行っている当研究室は私が修士入学した 3 年前から「農作物における土壌病害は微生物だけが原因ではない」という観点から、土壌線虫研究に着手しました。植物寄生性線虫と土壌線虫群集をターゲットに分子生物学的手法を用いた研究を続け、学会発表できるデータも出はじめましたが、研究開始時は誰も線虫を扱ったことがなく、線虫学実験法と線虫研究の歩みを手放せない状態でした。

今回の学会に参加し、大会中・懇親会・観察同定実習などで多くの方々から前記のような教科書では知り得ない情報・アドバイスをいただいたことが一番のアドバンテージとなりました。形態観察による同定が発達している土壌線虫において「分子生物学的手法のニーズ」を実感でき、有意な時間を過ごすことができました。全国の線虫研究者が集まる年に 1 回の機会ですし、欲を言えば、もっと多くの方と話をし情報収集・意見交換ができればよかったと後悔しているところもありますが、初めて参加する学会だったのでしょうがないとも思っています。また、分野が様々でしたが他大学の学生同士がコミュニケーションを積極的にとれる機会（例えば若手の会など）が得られれば、情報交換・忌憚ないディスカッションができ、今後の互いの研究生活にいい刺激になるのではないかと感じ、来年の学会参加の 1 つの課題ができたように思いました。

線虫研究が土壌、森林、昆虫など様々な分野があることは頭ではわかっていたつもりでしたが、発表内容が多岐に渡っていたことで改めてそれを実感した一方で、「線

虫はこれだけ多くの分野の研究対象になっているのだから、日本における線虫研究者はもっと多くていいのではないか？」という疑問も感じました。また、多分野に及んでいる線虫研究ですが、対象は違えど共有できる情報や手法が類似しているため、今後の参考になる情報が多く得られました。

いただいたご意見を参考に来年も学会発表できるよう研究をすすめていきたいと思えます。

線虫へのチャレンジ

武田 甲（神奈川県農業技術センター）

私は 1995 年に神奈川県に採用していただき、現神奈川県農業技術センターにおいて、堆肥および堆肥化技術の研究を命ぜられることから職業生活をスタートしました。それまで蚕をモデルに、昆虫体内の脂質シャトルプロテインの解析や卵黄タンパク質の生成メカニズムの解明などといったテーマで昆虫生化学を学んでいましたので、堆肥作りと聞いても戸惑うことが多かったのですが、幸い指導者や先輩に恵まれて土壌肥料分野の仕事も 10 年を越えました。私のこれまでの主な取り組みは、湖沼底泥やアオコの肥料化検討、スイカの堆肥化、海岸で異常発生しているアオサの堆肥化、各種の技術を用いた堆肥熟度検定法の開発の試みなどです。その後材料を有機物と土壌動物の関係にも拡大し、現在はミミズを用いた研究にも着手しています。

写真は、私たちが用いている堆肥化モデルプラントです。堆肥化は一見簡単そうですが、素材によっては意外に失敗しやすい農業技術ですので、写真の装置などのような堆肥化装置を作製して条件を管理したり、再現性のあるデータを蓄積したりします。私たちはそのような取り組みによって、通

常の堆積では到底堆肥化できない資材でも、工夫すれば有効利用できることを示してきました。

しかし、このような未利用有機物の利用を広く展開していくためには、ただ利用可能であるというだけではなく、利用する意義について深く考察していかなければなりません。そこで我々は、土壌病害虫を抑止する堆肥や、野菜の成分や生育を良好にする堆肥などを開発することや、様々な意味で環境にやさしい堆肥の使い方を明らかにすることを念頭に、仕事を行っています。

さて、神奈川県では 1980 年代までに、近岡一郎博士や大林延夫博士らにより、三浦ダイコンの総合防除へのマリーゴールド導入や、県内の植物加害センチュウの調査や薬剤試験などが行われました。その後は報文はありませんが、ここ数年に行われた研究としては、熱水土壤消毒の効果試験やパスツリアの効果試験などへの協力などがあり、しだいに線虫に目を向ける職員が増えてきているように思います。

神奈川県はダイコンの主要産地があることと、トマトやきゅうりの栽培が盛んであることから、キタネグサレセンチュウの被害やサツマイモネコブセンチュウの被害が問題になっています。県内では水稲、イチゴ、落花生、枝豆なども栽培されていますが、そのほかのセンチュウについてはいまのところ問題が表面化した事例は少ないようです。枝豆についてはシストセンチュウと思われる被害が過去に数例あるようですが、その他については大きな問題にはなっていません。

以下に、私の取り組みを若干紹介させていただきます。

おから・コーヒー粕堆肥は、未利用資源のリサイクルを目的として 1996 年までに

私たちのグループが開発した堆肥です。この堆肥は肥料として栽培に有益であることがわかりましたが、その後さらに、この堆肥を施用するとダイコンのキタネグサレセンチュウ被害が抑止される、という興味深い現象を見出しました。

この堆肥の原料であるおからは豆腐工場より、コーヒー粕は全国に点在する清涼飲料製造工場より排出されていますので、入手は比較的容易です。混合堆肥化には堆積初期の成分バランスや水分バランスが良くなることや、おから分解時に発生する悪臭や廃液をコーヒー粕が低減することなどの利点がありました。また、コーヒー粕には発芽阻害因子が含まれており、これは 2 ヶ月程度の堆積では残存することがわかったのですが、この発芽阻害は、おから・コーヒー粕堆肥では 2 から 3 ヶ月間の堆積により消失することがわかりました。

ダイコンの減農薬栽培技術における線虫防除技術としては、神奈川ではアフリカントールなどのマリーゴールド特定品種の栽培による防除が行われていました。マリーゴールドの栽培は有害線虫密度を極めて低い水準に落としますが、栽培期間が長いことや、栽培期間短縮のためには育苗・移植などの手間がかかることなどの問題があります。また、ダイコンは根菜類であるため、未熟有機物が残存する畑で栽培すると他の虫害がでます。そこで、マリーゴールドをすきこんだ後には長期間の休みを取る必要があります。この期間を短縮するために茎葉を持ち出すことが行われており、現地ではそうした手間も問題になっています。

おから・コーヒー粕堆肥の施用による線虫被害の抑止は、現在の技術開発状況では、マリーゴールド処理に及ばないのですが、環境保全型技術であるとともに、簡便な低

コスト技術であるため、補足的な効果を期待する場合は現状でも有用であると思われます。

現在私は、この肥料が土壌生物群の変動に与える影響の解析や、効果にかかわる物質の検索を行い、この肥料の特性解明と機能向上に取り組んでいます。またより詳細な知見を得るため、東京農工大学と共同研究を行っています。



実験用ミニプラントと筆者

広島県における線虫研究事情（林業編）

軸丸祥大（広島県立林業技術センター）

広島県の線虫研究事情（林業編）について紹介します。林業編と書いたのは、農業については本ニュースの No.38 に広島県立農業技術センターの星野さんによる記事が掲載されているからです。ここではまず、自己紹介を行い、次に私が採用される以前の広島県立林業試験場における線虫研究について簡単に触れます。そして就職してからこれまで私が行ってきた線虫に関する

仕事を紹介し、最後に広島県立林業技術センターにおけるこれからの線虫研究の行く末を予想してみたいと思います。

私は大学院在学中にマツ材線虫病の研究を始めました。大学院時代はニセマツノザイセンチュウ（マツ材線虫病の病原体マツノザイセンチュウの近縁種で日本に土着）とその媒介昆虫であるカラフトヒゲナガカミキリの生態や冷涼な地域におけるマツ材線虫病の拡大阻害機構に関して研究を行っていました。この研究を始めたのは、恩師である富樫先生（現在、東京大学）と大学院時代に運良く巡り会えたからです。その後、平成 8 年 4 月に広島県立林業技術センターの前身である広島県立林業試験場に採用されました。早いものでこの職場に来てから約 11 年が経とうとしています。今年の誕生日が来ると「不惑」になるのですが、この歳になっても様々な事柄に惑わされている気がします。

私が採用される以前の広島県立林業試験場における線虫研究は取りも直さず、マツノザイセンチュウに関係する研究と言えます。1970 年代初頭にマツノザイセンチュウが松枯れの原因であることが報告されてから、広島県においても各種の予算がつき、マツノザイセンチュウや媒介昆虫に関する研究がさかんに行われました。しかし、1980 年代後半にはマツ材線虫病に関する研究は下火になり、1990 年代のはじめにはマツ材線虫病に関して正規の予算がついた課題はほとんど無くなっていました。

このような状況で、私は広島県立林業試験場へ採用されました。採用から現在まで、理解のある上司の元で大学院時代の研究を（細々ながら）継続することが出来ました。一方で、採用から 3 年ほどは正規の研究予算をつけてもらえず、同じ職場の職員から

「どの予算を使ってそんな研究をしているのか？」との嫌味を言われることもありました。その後、ニセマツノザイセンチュウとマツノザイセンチュウの種間関係とマツ材線虫病防除を結びつけて広島県から予算をつけてもらえるようになり、研究が随分やり易くなりました。しかしながら、線虫関係の仕事に集中するあまり、林業試験場採用時から要望の多かったイノシシやシカなどの獣害やその他の病虫害にはほとんど手をつけることが出来ませんでした。「広島県においてこれらの研究が停滞している原因は私にある」と言っても過言ではないと思います。

また上記のテーマに関連する研究の途上で、新たな線虫との出会いもありました。2002年にマツノマダラカミキリ幼虫を個体飼育していたところ、10cmほどの細長い生物が脱出し、その幼虫は死亡しました。この生物は後に、中央農業総合研究センターの吉田さんやオーストリアのグラーツ大のカイザーさんにより *Hexameris* 属シヘンチュウであることが分かりました。本会の元会長である真宮先生から、「マツノマダラカミキリを含む *Monochamus* 属カミキリがシヘンチュウにより死亡した例は、世界的に見ても稀である。」と教えてもらい、新たな研究対象に武者震いをした記憶があります（恥ずかしいことに、最初にこのシヘンチュウを見た時には「気持ち悪い」と思ったのですが...）。少数ですが、このシヘンチュウの遊出を2003年以降も継続して確認しています（写真1）。残念ながら、種の同定に必須の雄成虫が得られていないため種名は依然として不明ですが、これからもこのシヘンチュウに関する研究を続けて行くつもりです。

最後に、広島県立林業技術センターにお

けるこれからの線虫研究の行く末を予想してみます。景気の悪い話ですが、広島県の林業分野における線虫研究の前途は多難です。前述のとおり、広島県における林業分野の線虫研究は「マツ材線虫病」に関連するものでした。しかし、今年度から広島県における研究予算獲得に関する仕組みが大きく変わったため、今後「マツ材線虫病」関連の単県予算を確保することは極めて難しくなりました。これからは競争的資金の獲得を今まで以上に目指す必要があります。さらに、組織改変の噂も絶えず聞こえてくるので、安心して研究できる状況ではありません。将来を不安視するばかりでは何も変わらないので、恩師の恩師にあたる先生が常々言っておられたという「研究は論文として公開されて完結すること。予算が無いから仕事が出来ないのではなく、仕事をしないから予算が付かないのだ。」との言葉の重みを噛み締めつつ、「競争的資金を獲得して広島県立林業技術センターで線虫研究を継続するには、線虫関係の論文をコンスタントに公表することがまず必要」と自分自身を鼓舞しています。



遊出したシヘンチュウと死亡したマツノマダラカミキリ終齢幼虫

[編集後記]

最近の悩み：査読などで線虫分野の方ではない研究者の文章を読むことがあります。すると文章中に時折「センチュウ」というカタカナ書きの語を目にします。私にとって「センチュウ」は、種名の一部として表記される場合を除き、何となく素人っぽくて用いるのに抵抗があります。線虫分野の方でなくとも研究者には「センチュウ」を使ってももらいたくないので、えい、と「線虫」に修正しているのですが、皆様はどう思われますか？ しかし最近インターネットで情報を得る場合にも、検索語を「センチュウ」にした方がたくさん検索されたりしますね。大勢の流れには逆らえず、研究者にとってもこれから「線虫」は「センチュウ」になっていってしまうのでしょうか...つまらない悩みですみません。

(岩堀英晶)

線虫学会ニュースも今回で40号になりました。学会発足当初のニュースを繰ってみますと、今や一線で活躍中の方々の新人紹介記事や線虫研修報告があったりして時代の流れを感じます。第2号の編集後記には、原稿をフロッピー(5インチ、3.5インチ;2DD...)で送ることやワープロ専用機が活躍しており、ファイル互換性に苦労している様子が書かれ、インターネット最盛の現在との違いの大きさに、なんだか懐かしさを覚えると同時にその当時の編集作業の苦労ぶりが感じられました。今の編集作業はその当時に比べれば格段に楽になったと言えます。毎回決まって苦労していることと言えば、この編集後記の作文くらい・・・。

今年も読みやすい紙面作りに務めたいと思います。と言ってもそろそろボタンタッチの時期かな?・・・

(串田篤彦)

2007年1月25日

日本線虫学会

ニュース編集小委員会発行
編集責任者 岩堀 英晶
(ニュース編集小委員会)

(独)農業・食品産業技術総合研究
機構 九州沖縄農業研究センター
難防除害虫研究チーム

〒861-1192

熊本県合志市須屋2421

TEL: 096-242-7734

FAX: 096-249-1002

E-mail: iwahori*affrc.go.jp

日本線虫学会ニュース第40号

ニュース編集小委員会

岩堀 英晶(九州農研)

串田 篤彦(北農研)

入会申し込み等学会に関するお問い合わせは、学会事務局：(独)農業・食品産業技術総合研究機構 中央農業総合研究センター

〒305-8666

茨城県つくば市観音台3-1-1

TEL: 029-838-8839

FAX: 029-838-8837

E-mail: aiba*affrc.go.jp